日系アメリカ人の言語的状況とエスニシティ
── カリフォルニア日系人を中心として ──

彦　坂　佳　宣

はじめに

本稿は1994年から96年にかけて立命館大学の学術研究助成を得て行った国際共同研究「日系アメリカ文学における二つの文化の葛藤とその変容の歴史的研究」のうち，言語的側面の調査の概要をまとめたものである。調査項目のうちいくつか重要と思われる点をとりあげて，全体を概括したものであり，他日にやや詳しい考察も予定している。

アメリカにおける日系人は今日では十分な同化を果たし，社会的にも成功した人種とされるが，また一方では固有の文化や性格を保有しているものと思われる。この間の事情を言語に関わる側面から検討するのが本稿の課題である。

日系アメリカ人の言語状況を考える場合，日本語中心であった一世がアメリカ主要社会に身をおいて英語に接し始め，何世代かの同化の過程を経て英語に至る道筋がどのようであるか，またその間における日本語の保持はどうであるかがまず問題になる。

アメリカ本土の日系人の言語変容については，日本語から英語への単純な変化であり，ハワイのようなピジン化はおこっていない[1]。日本語の中にいくらか英語を混用する頻度が高く，また日系人同士の間では英語に日本語をまじえる場合もあるが，これも単語借用のレベルでのことに過ぎない[2]。

次にそうした言語状況と関連して，日系人としてのエスニシティがどのように保有されているか，あるいは変容しているのかという視点がある。この場合，言語と関わり深い分野もあるし，言語外的な事柄に関することもあろう。また，エスニシティそのものをどう定義してかかるかという問題もある。

ところで近年は，それぞれの民族・人種がアメリカ主要社会にルツボのような状況

で融合するというより，それぞれの民族・文化的な集団が固有の価値を持ちながら全体としてアメリカ社会が形成されているという考えになってきている。日系人においても，初期の定住の時期に強い同化志向があった一方で民族の固有性を強く保つ面もある。また主要社会への同化が進んできている今日においては，自己のアイデンティティーを再考しつつ，改めて日系人としてその文化や民族性に目覚める過程が見られるようである[3]。

このような点から，本稿では日本語と英語をめぐるさまざまな状況について，我々の調査にもとづいて報告し，そのうえにたって日系人のエイニシティの問題に接近してみたい。ただし，今回は私自身もアメリカでの調査は初めてで，経験も浅く時間的な余裕のなさもあって，深い考察には至らない点が多い。しかし，実際の調査データに基づく報告であり，一定の判断材料とそれにもとづく基礎的な様相は提示できたかと思う。

1．これまでの研究

アメリカにおける日系人の言語に関する研究は，ハワイの例がよく知られている。ここでは農園に働く人々の間でピジンイングリッシュが話されており，また日本語の中にも多くの借用語が存在している[4]。

アメリカ本土ではこうしたピジンや借用語の例はない。また，ハワイほどは社会言語学的な研究は見られないようである。この中で前田卓氏の研究[5]は，1960年代のカリフォルニアの日系人三世代の膨大なデータを駆使して行なったさまざまな視点での包括的なもので，世代間の違いや各種の日系人のタイプを見いだしている。

近年ではヤマノ・カズミ氏によるUCLAの学生を対象した調査・研究[6]があり，若い日系人も日本語を保持し，日系文化に誇りを感じ，日本語のシンボル的な使用にも関心があることを報告している。

また，ハヤシ・ケイコ氏[7]は，異なる世代の女性の日本語の変種的用法に焦点をあてて，二世・三世になるとその文法的な性格には単純化や省略の傾向が生ずることを考察し，二世と三世との間に言語的な差異・断絶が多いことを見いだしている。しかしまた，日系コミュニティーでは，そうした日本語がいろいろな点で便利であり，単語を使うだけでも象徴的な意味があり，日本語の学習のための動機にもなっていることを述べている。

ジョン・コナー氏には，またカリフォルニア州サクラメントでの世代間にわたる調

査がある[8]。エスニック・アイデンティティの指標を使って，同化の過程や世代間の差異を考察し，また多量のインタビューによってその裏付けをしている。これを受けて，江渕一公氏（注9）は，サンノゼ日本人町での世代間の比較を行い，日本語を使えない三世などの若い世代でも日系人としてのエスニシティを保持し，さらに太鼓などの訓練や公演をとおして新たな日系としての意識が生まれてきているとする。

このような研究を参考にすると，世代間の差異や日本語と英語との使用状況の推移はよく捉えられてきているが，なおエスニシティとの関わりや，若い世代での日本語への関心の所以，日系アイデンティテイーの変化しつつも存在する状況などを知りたくなる。

また，日系人史や日系人教育史をかえりみることを通して，そうした動向との整合的な解釈も必要であろう。

本稿は，残念ながらこうした問題にあまり答えるものにはなりそうもないが，上のような研究を参考にして，しばらく調査データの具体的な整理から見えてくるものを記すことにする。

2．調査の概要と研究の方法

調査の概要

本稿の直接の考察材料となるのは，1994年の夏から準備し，冬から95年春にかけておこなった日系アメリカ人への通信調査のデータである。調査は言語および言語生活に関する70項目弱からなる。調査票の形式は，同じ内容を日本語と英語で左右に並べて記し，どちらかを選んで回答してもらうようにした。各事項の質問には多くマルティプル・チョイスの選択肢を配し，いくつかは回答者自身が手短かに記載する項目も交えた。これをカリフォルニアの日系人に後で述べる県人会組織を通じて約1700通依頼し，そのうちから500通あまりを回収した。県人会を通じたことで回収率はかなり良かった一方で，幾らか日系社会に近い性格の回答が増したことも考えられる。

具体的には，県人会から提供された名簿に対して，挨拶状（立命館大学の今回のプロジェクト名と教員名，さらに県人会長の挨拶を添えた場合もある）と各二通づつの調査票を返信切手を貼った封筒に入れて発送し，この研究会のメンバーの一人ヤスハラ教授の所属するロサンゼスル州立大学に返送してもらう形をとった。また，一部の県人会では新年会その他の行事の集まりに同様なものを手渡ししてもらうよう依頼し，返送は上と同じとした。

初めの計画では他の地域の調査も予定していたが，時間的な関係などで有効な調査手段が得られず，結果的にはサンフランシスコ・ロサンゼスル近辺のカリフォルニア地域の日系人を中心とすることになった。カリフォルニアは日系人が最も多く居住する地域であり，結果としてこの地域を選んだことは一定の意味があると考えている。近年，日系人の個人名簿の入手は困難であり，調査規模と期日などの問題からこうした調査手段に落ちついたのである。

しかし，県人会の組織のお陰で回収率は30パーセント弱（発送封箇数をもととする）とかなりよかった。また回答の整理段階で分かったことであるが，二通の調査票を入れたためか，回答者は必ずしも県人会の常連だけにかぎらない場合も多くあった。回答の大部分は，氏名・住所その他の属性を正確に回答し，信頼性も高いものと考えられる。

また，95年夏には，上記の回答者からインタビューの応諾を得たロサンゼルス周辺に住む15名を選んで，面接調査を実施した。

なお，以上の調査には，今回のプロジェクトの要員ではないが，社会言語学の研究をしている久野和子氏（当時，筑波大学大学院生）の多大な協力を得たこと，整理の段階でも各種の有益な教示を得たことを特に記しておく。また，本誌には本稿を発展させた視点での久野氏の論文も，あわせて掲載されている。

研究の方法

本稿ではこのプロジェクトの報告をかねて，まず調査した事項のうちから，主要な調査項目の回答を世代別に報告し，そのうえにたってエスニシティの問題に言及してみたい。世代別の整理の必要性は言うまでもないが，日系人は移住先での同化が急速に進み，世代間の差異も顕著のようである。また，移住者自体が自己を世代によって同定する傾向も顕著に見られるように思う。ここでは，世代を次のように区別しておく。

①戦前一世……第二次世界大戦前に移住した世代

②帰米二世……①の子弟で主として幼少期に日本で教育などを受けて再び米国に帰った世代

③戦前二世……①の子弟で戦前に生まれた世代

④戦後二世……①の子弟で戦後に生まれた世代と戦後の新一世の子弟

⑤帰米三世……③の子弟で幼少期に日本で教育などを受けて帰った世代（本調査では１人のみ）

⑥三　　世……主として③の子弟

⑦四　　世……主として⑥の子弟

⑧新 一 世……戦後アメリカに移住した者

次に考察対象の項目内容についてまとめておく。

本稿では，考察にあたって，主要な調査項目を大きく客観的な事項と主観的な事項とに分ける。その意図は，客観的カテゴリーによってやや外部的な見地からの状況をとらえること，次にこれに対して主観的カテゴリーによって内面的な意識を推測する，そしてその総合によって日系人の言語状況とエイニシティとの関連を推測してみようとするのである[10]。

客観的事項の整理では，言うまでもなく世代を重ねるにつれて日本語から英語へのシフトが顕著にみられよう。しかし，これをもってただちに日系人の内面性が失われたとか日系人らしさが喪失したということにはならなだろう。言語的なシフトを経ながら，またおそらくは日系人としてのエスニシティの変容もありながら，何らかの形で日系人としての意識そのものは存在するのではないか，そこを主観的な事項を参照することによって推察してみようとするのである。

3．主要項目の整理とその状況

以下に各項目ごとに回答を整理したデータを提示し，調査範囲での日系人の状況を考えていく。

（1）回答者の属性

回答者の属性は表1のとおりである。

まず，世代のうち分かりにくいものを説明しておく。「その他」はメキシコ・ペルーなどから移住して来た日系人である。「不明」は世代についての回答に答えなかった者，「不明二世」は二世であることは判明しているが生まれ年がなく戦前二世か戦後二世が分からない者である。これらは合計18人で全体の3.3パーセントを占めるにすぎず，以下の考察では特にふれない。ただ，上の点からもこの調査に対する回答がかなり真面目に行われていることが窺えよう。

次に世代の並べ方であるが，これは戦前一世を筆頭にして，以下，初期に移住した世代，またその中では日本に各種の意味で近いと考えられる世代から順に並べてある。表の数値は「生年」を除いて該当者の実数である。

表1　属性

世代		戦前一世	帰米二世	戦前二世	戦後二世	帰米三世	三世	四世	新一世	その他	不明	不明二世	総数
総数		6	79	133	23	1	58	9	199	2	26	2	538
調査票別	日票回答	3	59	4	0	1	1	0	166	0	12	0	246
	英票回答	3	20	129	23	0	57	9	33	2	14	2	292
性別	男性	4	48	76	6	0	22	4	87	1	7	0	255
	女性	2	31	57	23	1	36	5	111	1	11	2	274
	不明・無答	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	0	9
国籍	米生まれ米国籍	0	71	128	19	1	54	9	1	2	6	2	293
	米に帰化	3	4	3	2	0	2	0	72	0	4	0	90
	米生まれ日本籍	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
	日本籍	3	1	0	1	0	0	0	126	0	8	0	140
	ペルー籍	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	不明・無答	0	1	1	0	0	1	0	0	0	8	0	9
生年	最少	1986	1909	1904	1946	1935	1928	1949	1906		(以下略)		
	最大	1927	1966	1942	1978	1935	1976	1975	1976				
	平均	1907	1923	1924	1967	1935	1949	1962	1943				
学歴	義務教育	2	15	10	2	0	0	0	0	0			
	高卒	2	42	57	5	1	15	1	82	1			
	大学以上	2	21	65	16	0	42	8	88	1			
	不明・無答	0	1	1	0	0	0	0	3	0			

〈1〉調査票別の回答状況

調査票に日本語・英語の二種あることは述べた。寄せられた回答もこの二種あることになる。そこで，日本語・英語による調査票（以下，それぞれを日票・英票と呼ぶ）の回答別を見ると，英票による回答は全体の54パーセントと日票のそれをやや上回る。世代別に見るとこの回答には顕著な違いがあり，日票による回答は帰米二世・新一世が中心で，他の世代は英票に集中する傾向が強い。前者の世代が日本

と近い関係があるのに対し，戦前二世以下の後者の世代は言語の点でアメリカへの同化が強いことがはっきり出ている。新一世は，これに対して日票での回答がやや上回るものの，英票での回答も多く，言語的な同化の点では戦前の模様とかなり異なる。新一世の英語化（英語も出来ると言うべきか）はかなり進んでいる模様である。この違いには，学歴や職業その他さまざまな要因がかかわっていることが思われる。なお，戦前一世・帰米三世などは回答者数が少ないので評価の難しい点がある。

以下，こうした回答票の違いが関与する点が多いので，整理にあたっては，煩雑であるが日票と英票とを別々にして考えていく。

〈2〉性別

総数では大きな差はないが，各世代に細分すると〈二世〉類，新一世などにやや偏りが生じている。この点は注意が必要かと思うが，以下では特に性差にふれない。

〈3〉国籍

これは新一世になお日本国籍を持つ率が高いこと以外は，特に注意する点はない。〈二世〉類以降で「米に帰化」とする者は，人生のある時期に意識的に米国籍を選択した者と思われる。ペルー籍の者がいることも人口流動の点では注意されるが，以下の考察では特にふれない。

〈4〉生年

世代と生年との関係を最少・最低・平均の3つを総合して見ると，もちろん戦前一世が最も早く，次に帰米二世と戦後二世とがほぼ並び，次には三世が来て戦後二世，四世の順となる。今回の調査では，三世は戦後二世より相対的に若い。四世はやや年齢に幅があり，新一世となるとさらに幅がある。新一世は中年以降になって子供を頼って渡米した層から最近になって日本を離れた若い層までかなり多様なのであろう。こうした世代による区分では，その内部にいくらか多様性を含むものになるが，今はこのままとする。

〈5〉学歴

これは世代を重ねる毎に確実に高くなっている。「大学卒以上」の率が約半分を越えるのは（不明などを除く），少ない率の方から挙げると戦前二世・新一世・戦後二世・三世・四世の順となる。

このうち新一世は上に述べたように実状は多様であり，一定年齢以下の層ではかなりの割合で大卒以上の居ることが推測される。先に見た新一世が英票で回答する率の高いことは，こうした事情の反映であろう。また，戦後二世と三世とでは，三

世の大卒率が高いが，これは戦後二世が年齢的に若いことも一因ではないかと思う。

しかし，世代をかさねるにつれて高学歴化することは，顕著に見て取れる。

〈6〉職業

これは複雑なので別にして表2にまとめた。表の数値は世代ごとの小計を100としたパーセント値である。空欄は対象職の無い場合である。職種の分類にあたっては，数種の職が回答されていればより表の並びの上位のにある職種に該当するものとして処理した。ただ，漠然とした職名の回答も多く，やや厳密さに欠ける点もある。

しかし，概観すると，戦前一世は半熟練・単純労働の比率が多く，帰米二世・戦前二世になると専門職や事務職が増加する。これらに上級管理職の多いのは会社を経営したり重役をする場合が多く，年齢も高い特徴がある。戦後二世はまだ学生世代もあるが単純労働より管理・専門職に集まり，三世は同じく専門・技術職の高さと各種の職の広さがある。四世もよく似ている。新一世は，多様な年齢・学歴などを反映して，管理・技術職もあれば半熟練職もあり，やや多様である。

概括すれば，戦前一世の単純・半熟練の職から次第に専門的・技術・管理的な職種への拡大が見られることと，移住して新しい新一世の職種の多様さが見て取れよう。

表2　職業

日英・職業合同生データ

	戦前一	帰米二	戦前二	戦後二世	帰米三世	三世	四世	一世	その他
上級管理職		3.8	2.3			3.5		6.0	
中級管理職		2.5	1.5	13.0		10.3	11.1	3.0	
専門職		5.0	16.5	17.4		20.7	22.2	4.0	
版専門・技術職		11.4	20.3	17.4		31.0	44.4	27.6	
スーパーバイズ			3.0	8.7		8.6		0.5	
事務	16.6	11.4	8.3		100	5.2		13.1	
販売		1.3	2.3	8.7		3.5		2.0	
サービス	16.6	2.5	4.5	4.3		5.2		4.0	
専門技術・通商		5.1	6.8			3.5	11.1	5.0	
半熟練	33.0	31.6	13.5			1.7		15.1	
単純労働	16.6	6.3	6.8			1.7		10.6	
学生				21.7		1.7		2.0	100
退職・無答他	16.6	19	14.3	8.7		3.5		7.0	
小計	6	79	133	23	1	58	9	199	2

〈7〉県人会

県人会の組織に協力を得た調査で，そのおよその内訳は表3のようである。これには色々問題もあり，カリフォルニア日系人の像をよく反映しているのかどうかの点，沖縄などの回答比率の多いものがあること，さらには県人会組織を通じたために日系人の像に偏りが生じたのではないか，などが懸念される。しかし，今はそれを吟味したり他の材料で比較する余裕がないので，参考に供するにとどめる。

表3　県人会

県・地域名	人数
沖縄	125
広島	60
和歌山	31
北海道	37
熊本	5
大分	10
埼玉	9
宮城	12
愛媛	3
九州	4
香川	2
その他・不明	12
無答	228
計	538

以下にこうした属性をもつ人々への調査の具体的な様相を見ていくことにする。

（2）客観的事項

（2－1）言語能力・環境

〈1〉言語能力の自己評価

この点の全体像をさぐるために，まず自己診断による言語能力評価をまとめた図1．2を見てみよう。

これは，調査票で「日・英」別に「聞く・話す・読む・書く」の4分野の能力を

「1全くダメ」～「5よく出来る」までの幅で評価してもらったデータを整理したものである。

八角形のグラフの中心から外まで0～5点をとり，各頂点にそれぞれの能力分野が配置してある。点数化の方法は，例えば表1属性（6頁）で見ると，新一世のかなりの部分は日票での回答，いくらか英票の回答もある。この両回答を加えて平均値を出したものである。このうち，戦前一世と帰米三世の回答者はそれぞれ6人と1人で，特に帰米三世はその世代を代表するとは言いにくい面も含まれている。また図を2つにしたのは世代数が多くて見にくいためで，図1に古い世代，図2に比較的新しい世代を置いた。

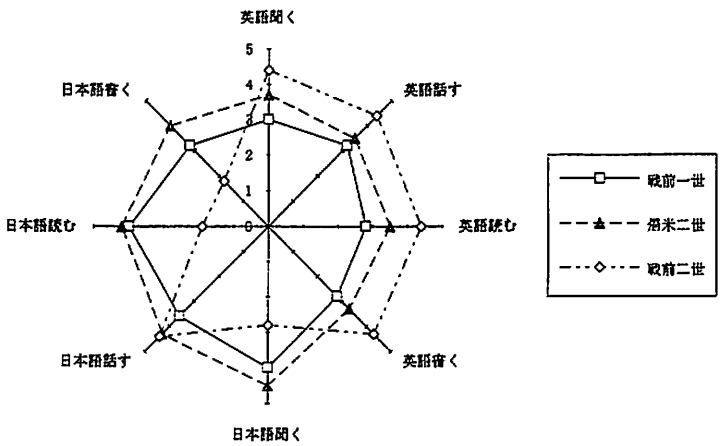

図1　古い世代の言語能力

さて，図1を見ると，戦前一世の点がかなり低く，その外側を囲むように帰米二世がある。しかし，帰米二世も日本語・英語ともによく出来るとは言いがたい。戦前二世はかなり変形し，英語能力はかなり高いが，日本語能力は「話す」を除いて極端に低く出てくる。こうした点は各世代の固有の状況が関わっているのであろう。

一般に，戦前一世は地方出身者が多く，学歴も総体に低く，職業としては第一次産業に従事する（した）ことが多い，帰米二世は日本で中程度の教育を受けたが英語には弱い・・などのことが言われているが，今回の調査データで見るとどうであろうか。

表1の属性によると，戦前一世と帰米二世との学歴差ははっきりとした形では出ていない（これは恐らく戦前一世のデータの少なさによろう）ので明確なことは言えな

い。しかし，職業では戦前一世が専門的技術を要しない部類のものが多いのに対し，帰米二世は管理・専門職の領域にも及んでいて，日本語・英語とも使用する機会の多い経験があった，その差異が考えられよう。しかし，戦前二世に比べると職業の点ではやや高度・専門的な領域に及ぶことが弱く，教育そのものをアメリカで受けた戦前二世の英語力にはとても及ばない。同じ〈二世〉世代ではあっても，日系社会での生活圏を異にするのであろう。しかし，その具体的な検証はいま出来ない。

その戦前二世は，逆に日本語能力は「話す」を除いてかなり低い。戦前一世の家庭で口語の日本語に接する機会あるいは日本語学校に通う機会があったものの，継続的な学習が必要な分野の「読む・書く」は低いのである。この点は，かつての家庭での言語環境，日本語学校の経験などについてさらに検証する必要があろう。

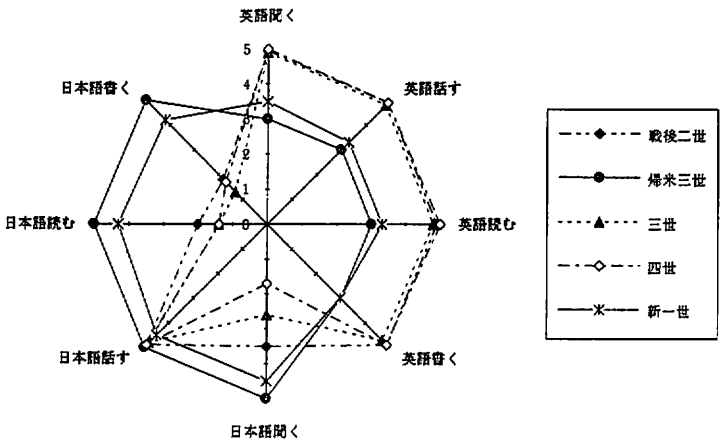

図2　新しい世代の言語能力

続いて，比較的若い世代を整理した図2を見よう。

帰米三世は1人で参考にならないので省くとして，日本語が優れているのは新一世，しかしこの新一世はまた図1の戦前二世並みの英語力も備えるのが特徴である。表1の学歴から分かるように，概して新一世の学歴は高い層も多く，職業も半専門職・技術職を中心によく社会に進出しているのと相関する。ちなみに今後の日系人の英語化は，このような新一世の登場によって戦前のそれよりも加速度的に進むことであろう。

戦後二世・三世・四世の英語はほとんど「よく出来る」に集中するが，日本語能力は概して劣り，そのうちで戦後二世が最も良く，三世・四世と世代を経るにつれ下っ

てくる。それでも日本語の「話す」がどの世代ともかなり高いのは，やはり日系人社会の中で話す日本語に接する機会が多いためであろう。この点は後で見る家庭内での言語使用と関連がある。

以上を総合すると，世代が古く日本との距離が近い層は日本語が強く，しかしこれに属する新一世は相対的に英語にも強い。世代を経て日本との距離が遠ざかるにつれて英語が優れ日本語は弱くなる。特に，学習する必要のある「書く・読む」といった分野になると極端に低くなることが明らになってくる。

以上の点は今回の調査によるまでもなく常識的な様相とも言えるが，今回の調査によってもこうした点が確認できた。次の課題としては，こうした状況，とくに若い世代の日本語も「話す」分野では日本語と近しい点の案外に見られることが，エスニシティなどの保有あるいは変容とどう関連するのか，興味ある研究視点かと思われる。

〈2〉家庭の言語環境

次に，家庭での言語環境について考える。これは，家族間で日英どの言語が使用されるかを見たものである。

これに関連する項目として，昔の状況と今の状況とをいくつか設定したが，その中から①「子供の頃・父からの言語」②「今・父への言語」③「今・兄弟への言語」④「今子供への言語」の4つの面を取り上げてみる。

図3が　「子供の頃・父からの言語」の場合である。このうち，図3-1は日票での回答，図3-2は英票での回答を整理した（以下，日表と英表を図-1／-2に対応させておく)。以下のグラフは表1の世代総数から「不明」「不明二世」の数を除く数値を100とした％にもとづいている。回答の少ない世代はグラフが低くでているが，世代ごとの様相はその内部の相対比率で見る心要がある。

図3-1によれば，戦前一世が父からの言語が日本語なのは当然として，帰米二世も日本語であった。図3-2英票の場合は，日本語が多いのは新一世は当然として，やはり帰米二世・戦前二世，そして戦後二世もかなりこの傾向があり，三世になると英語と日・英の混在，四世では英語が圧倒的となる。

これらもほぼ常識的な様相であるが，世代を経るにつれて着実に父からの言語として英語が多くなること，しかしまたかなり後の世代まである程度は日本語に接する機会のあったことが注意されよう。その日本語は，日本語学校での学習もいくらかはあるが，やはり日常的な家庭での「話す・聞く」機会であったと考えられる。この部分が，先の図2の〈二世〉群以降の世代が日本語の「話す」また「聞く」がある程度は強いことと関連するのであろう。

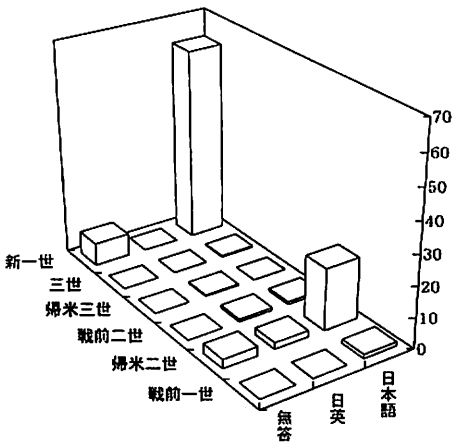

図３－１　子供の頃・父からの言語

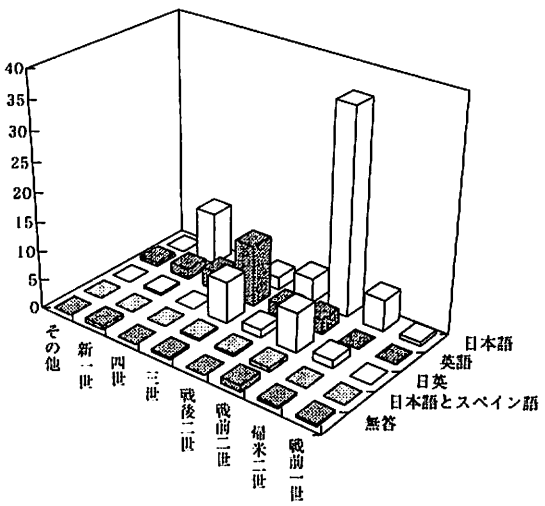

図３－２　子供の頃・父からの言語

なお，英票にスペイン語があるのは，メキシコ・ペルーなどから移住した日系人のいるためである。

②「今・父への言語」

次には，いわばそうして育った世代がいま父親にどの言語で接するかの様相である。無答の多いのは父を失った場合も多いためであろう。しばらく無答は無視して考える。

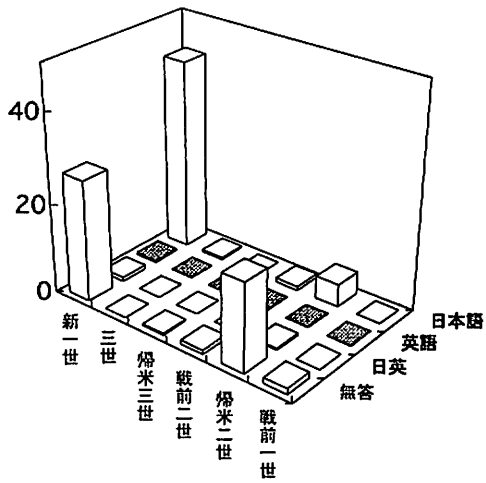

図4-1　今・父への言葉

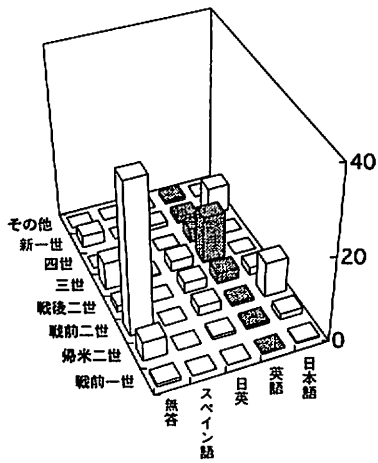

図4-2　今・父への言葉

図4-1日票による場合，新一世は勿論，帰米二世も日本語で父に接することが多い。父が主として日本語の使い手であることに加えて，帰米二世自身の日本語への親しみが強いせいもあろう。図4-2英票の場合，さすがに英語が増えるものの，やはり帰米二世・戦前二世は日本語の率が高い。これが三世・四世になると英語が圧倒的となる。三世・四世では，父からの言葉は日本語もあるが，答える側の三世・四世はまず英語ということになる。

③「今・兄弟への言語」

図5-1は日票での「今・兄弟への言語」である。戦前一世が日本語であることは当然として，帰米二世も日本語による割合が多い。スペイン語・ポルトガル語などがあるのは，南米からの移住日系人の回答である。

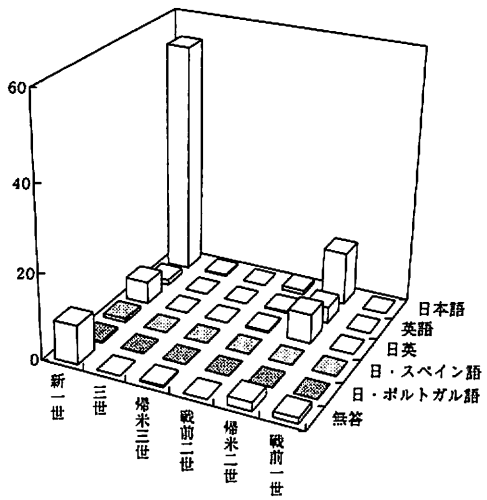

図5-1　今・兄弟への言語

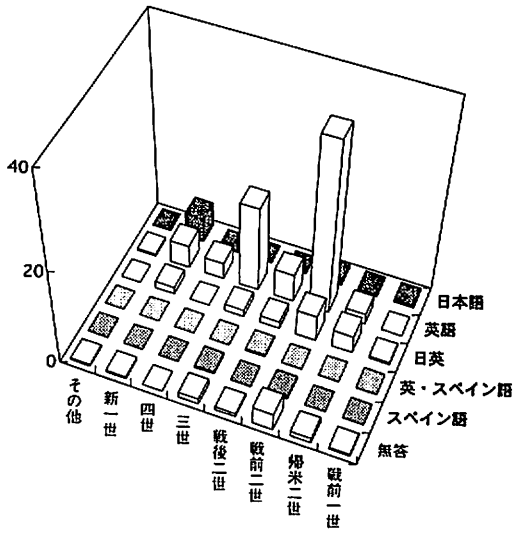

図5-2　今・兄弟への言語

これが図5-2英票の場合には，〈二世〉群・三世・四世ともに英語が格段に優勢となる。これらの世代ではすでに英語が常用なのである。日・英を交える場合のあるとするのは，帰米二世・戦前二世の一部などであるが，これは相手によって切り替えることも想定される（例えば義理の兄弟の関係など）。しかし，何れにしても英票で回答した世代は新一世・戦前二世の一部を除いて英語を普通とする模様である。

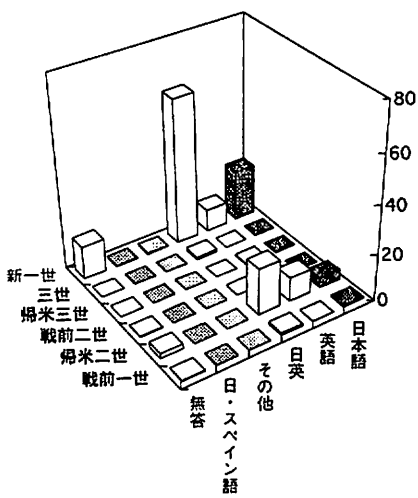

図6-1　今・子供への言語

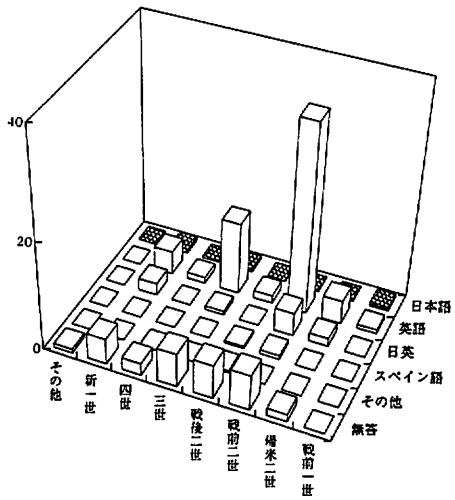

図6-2　今・子供への言語

図6は④「今・子供への言語」の場合である。図6-1日票の場合，さすがにどれも英語が圧倒的になり，新一世がいくらか日・英をまじえたり，わずかに日本語という人もいる程度になる。図6-2英票の世代ではもう英語で接することになる。ことに新一世でも英語で子供に接する率が多くなっている。新一世の英語力がある程度高いことも理由であろうが，戦前の日系人より英語へのシフトが早く高いことになろう。

以上を概括すれば，古い世代は日本語を残し，新しい世代になるほど英語への転換が強くなっている。

以上の家庭での言語使用を主とした様子からも，戦前一世と帰米二世の群とその他の群，そして中間的な新一世と，3つの層が区別されるようである。そして，世代を経るについて英語化が着実にまた急速に進行している模様が見られた。

言語能力は自己評価の回答にもとづくもので，一方ではその回答の信頼度の検証が必要である。それには調査項目に加えた日本語と英語の知識を問う設問との検証が有用であるが，これは次の機会としたい（久野論文に多少の指摘がある）。

（2－2）言語関連事項の志向性

〈1〉「新聞」

言語関連事項のひとつはテレビ番組・新聞などに接する場合を聞いたが，まず，

「読む」ことを中心とする新聞について見よう。

この調査はどの程度新聞を読むかの調査ではなく，日・英言語に接する問題として設定したものである。

まず，「日本語新聞」の場合を図7とした。図7-1日票の場合は，帰米二世はやはり「いつも読む」が圧倒的である。新一世の方が「いつも読む」への集中度はむしろ低い。図7-2の英票の場合も，日本語新聞をよく読むのは新一世と帰米二世であり，その他の世代はあまり頻度が高くない。とくに戦前二世・戦後二世・三世などは日本語新聞であっても英語部分のみを読むとの回答をわざわざ注記（この選択肢は事前には組み込まれていなかった）していて，日本的な情報媒体ではあっても英語によってそれに接する場合のあることを語る。

これと対照的に「英語新聞」の場合を見ると，図8-1日票の場合，新一世も帰米二世も「いつも読む」の率がかなり高くなっている。とくに帰米二世の集中度は強い。日本語に親しいといっても，やはり帰米二世は英語に接する（した），期間も長く英語の新聞も必須のものになっているのであろう。それに比べると新一世の「何時も読む」への集中度は低い。図8-2英票では，「いつも読む」の率が高いのは戦前二世，帰米二世グループで，新一世はおくとして三世・四世は「時々」「たまに」の率がやや高い。このあたりは，日英どちらの言語に接するかではなく，新聞に接する頻度を語るとすべきだろうか。評価の目的とズレた設定になったかと反省している。

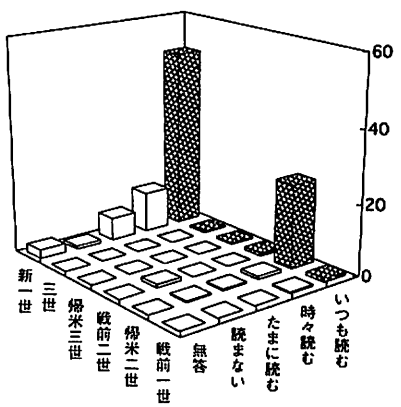

図7-1　日本語新聞

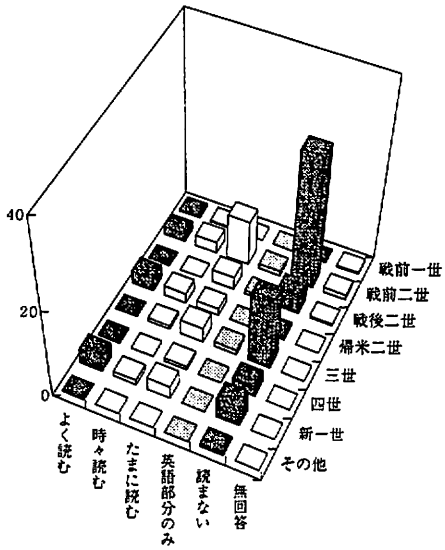

図7－2　日本語新聞

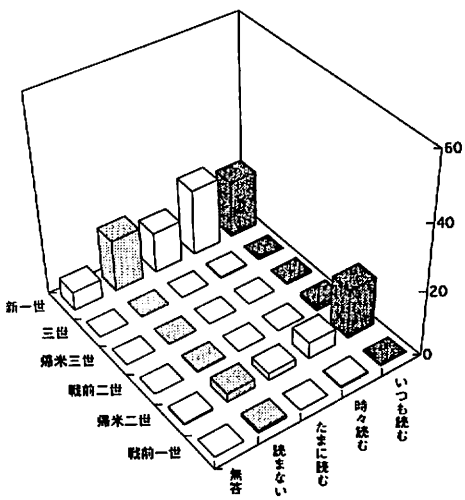

図8－1　英語新聞

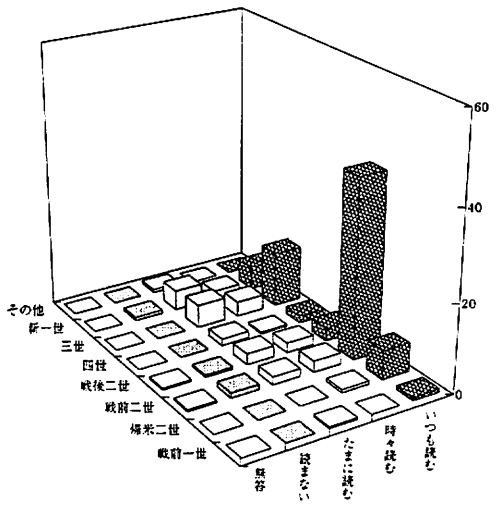

図8-2　英語新聞

〈2〉「テレビ」

「聞く」ことを中心とするテレビの場合はどうであろうか。

まず，日本語によるテレビの場合を見よう。

図9-1日票は，①「新聞」の場合とよく似た状況であるが，全体に「いつも見る」よりも「よく見る」の方に偏りがちである。これは日本語テレビを見る率が低いためではなくて，日本語テレビの番組のある日・時間帯に限りのある場合もあって，このような回答の仕方になったのではないかと思われる。それは，後で英語によるテレビをとりあげる時にはっきりする。この点を考慮すれば，戦前一世・帰米二世・新一世ともかなり見ているのではないかと考えられる。

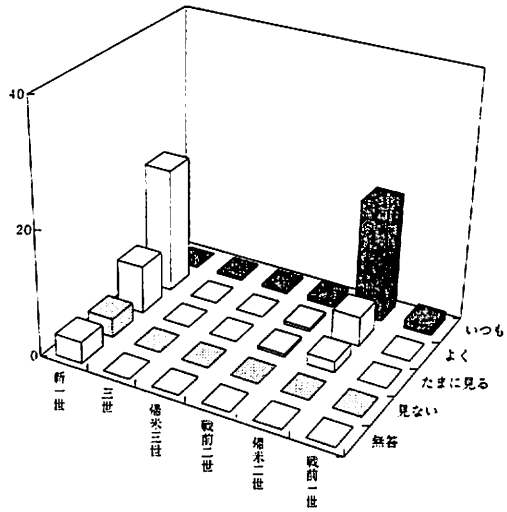

図9-1　日本語テレビ

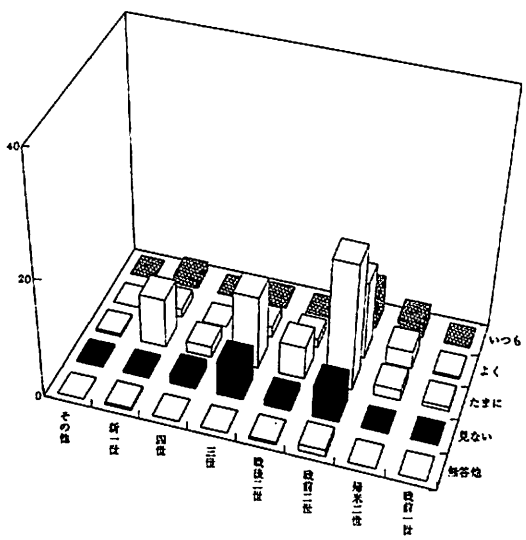

図9-2　日本語テレビ

図9-2は英票での回答の世代である。三世と四世に「見ない」率がややあるが，他の世代では「たまに見る」頻度以上の答えが多い。三世・四世は日本語に弱いことが主要因であろう。また取り上げられる番組も魅力に乏しいのであろうか。その中で

も戦前二世だけは，「いつも見る」の率が高いが，また「見ない」率も同じ程度あって，その内部に分化の傾向が見られる。これが他の調査項目にも当てはまるかどうか注意したい。

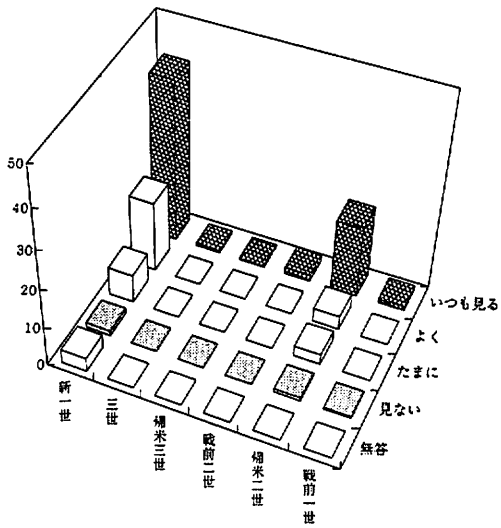

図10-1　英語テレビ

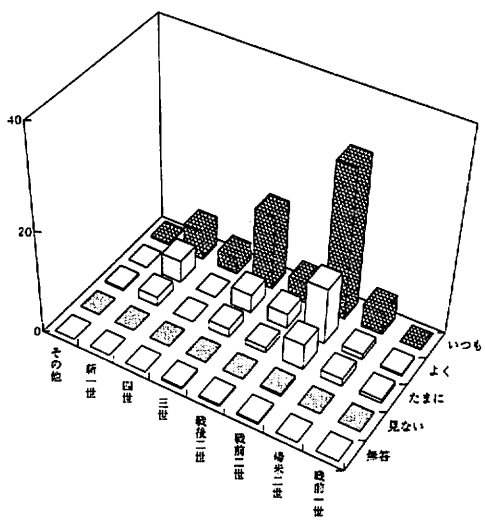

図10-2　英語テレビ

次に，英語のテレビの場合をみる。

図10-1日票では，帰米二世は「いつも見る」，新一世も同じであるがやや「よく」「たまに」への傾斜がある。新一世の英語力の弱い点が主たる要因なのであろう。新一世の中には英語に弱い者も含まれる混在的な層であることは述べた。この傾向からすれば，図9-1「日本語テレビ」の場合に「いつも見る」率がやや低かったのは日本語テレビの放映日時や時間帯の少なさが関与すると考えられる。

図10-2英票では，回答者の少ない戦前一世を除き，どの世代も「いつも見る」率が最も高く，良く見ている。先の「日本語テレビ」の場合には，「見る」層と「見ない」層とに分裂気味であった戦前二世も全体によく見る傾向があり，同じく三世・四世はやや見る率が低い傾向にあったものが，こちらでは「いつも見る」率が高くなっている。要するに「日本語」によるテレビが見る頻度に関与していることになる。日本語能力をある程度もつ戦前二世の，日本語とその周辺の事柄に対する評価の分裂した模様，三世・四世の日本語力の乏しさが日本語テレビの視聴率を低めている，といった事柄が推測できよう。

次には，間接的に言語にかかわる項目をいくつか取り上げてみたい。

〈3〉「暗算」

暗算は心中での言語利用の形をとるものと考えられる。この場合の言語はどうであろうか。

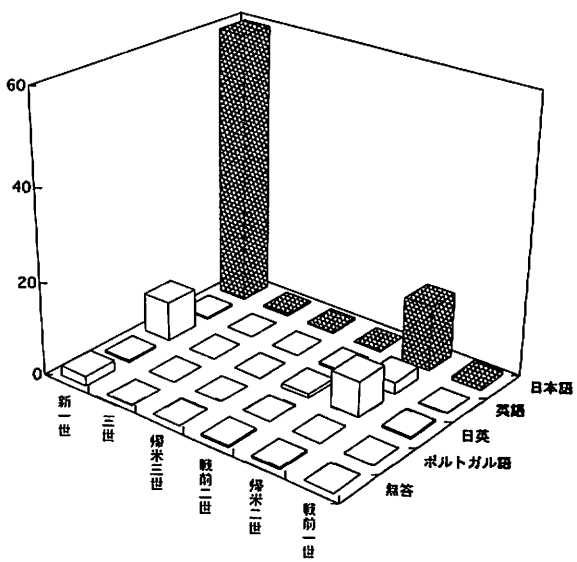

図11-1　暗算

図11-1日票の場合，新一世・帰米二世ともに日本語による暗算，続いて日・英を場合によって使うという回答である。英語とする回答は帰米二世にわずかに見られるに過ぎない。

図11-2の英票の場合は，新一世に日本語が英語よりもやや上回る以外は英語が主流である。その内では，帰米二世・戦前二世という古い世代に日・英両用の答えがいくらか混じる。

これも世代の様相からすれば順当なところであろう。

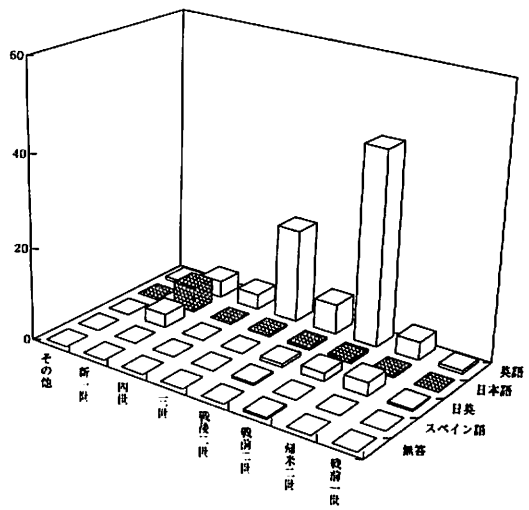

図11-2　暗算

〈4〉「犬の鳴き声」

図12-1が日票である。「日本語」とあるのはワンワンなどの場合，英語とあるのはバウワウなどの場合としてある。ここでも帰米二世は日本語による表現に傾く。新一世が日本語に傾くのは当然としても，英語・日英両用もあるのは英語化への傾斜として注意される。

図12-2が英票による場合である。この事項ではどの世代も英語が一番ではなく，大体は日・英両語で場合によって使いわけると回答し，三世・四世もその率の高いことが注意される。その中でも帰米二世はやや日本語に傾く様相である。

厳密には誰を相手としてそう言うのかが問題であろうが，全体として英語流の言い方への傾斜が他の事象に比べてやや弱いように思う。

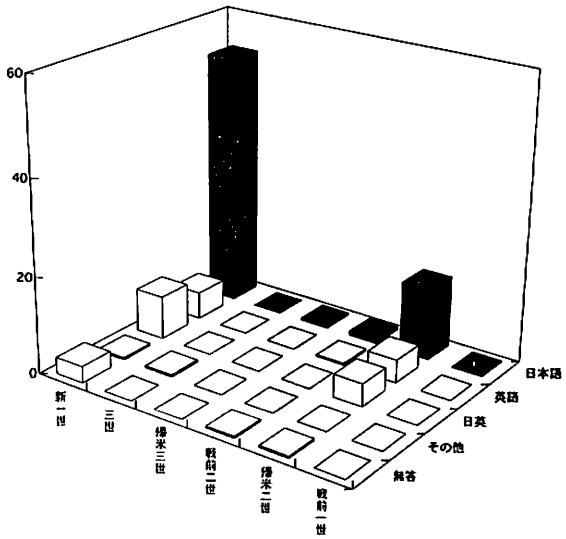

図12-1　犬の鳴き声

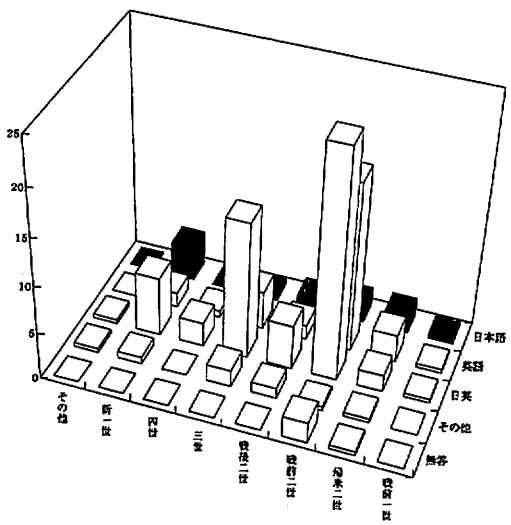

図12-2　犬の鳴き声

〈5〉「突然の声」

これは，「熱いものにさわった時の声」を聞いたものである。

図13-1日票の場合，新一世は日本語に英語がまじり，帰米二世は日本語と英語の回答が半々である。

図13-2英票の場合は，回答した世代の全てに英語が多く，相対的な比率で見ると

帰米二世・新一世に日本語の率が高い。帰米二世の中には英語の方を答える率も無視できないが，全体としては日本語への傾斜が強いのである。

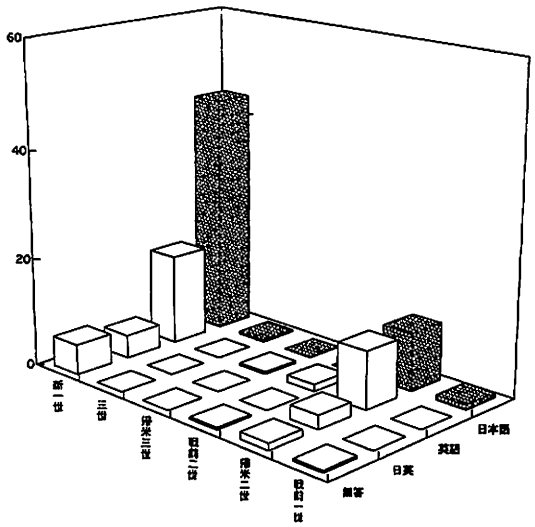

図13-1　熱い

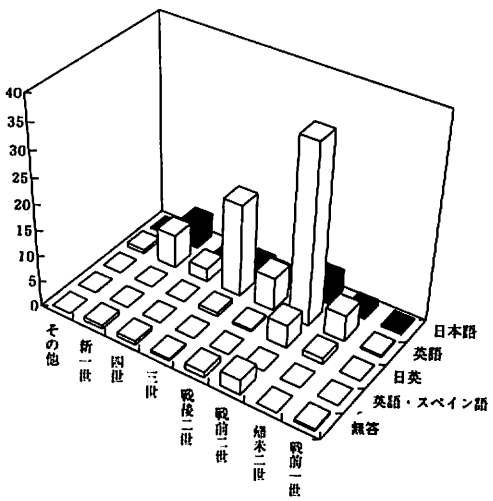

図13-2　熱い

〈6〉「困惑のしぐさ」

これはいわゆるボディー・ランゲッジの一種を聞いたものである。グラフの内「日本的」とするのは首を傾げるような動作，「英語的」とするのは肩をすくめるような

動作をそれとしている。

図14-1 日票の新一世・帰米二世ともに日本語的なしぐさが多く，やや英語的な動作もある。この内，英語的な動作はさすがに帰米二世の方が多い。

図14-2 英票の場合は，どの世代も英語的な動作が優勢であるが，どの世代もかなり日本的な動作が一定の割合を占めていることが注意される。

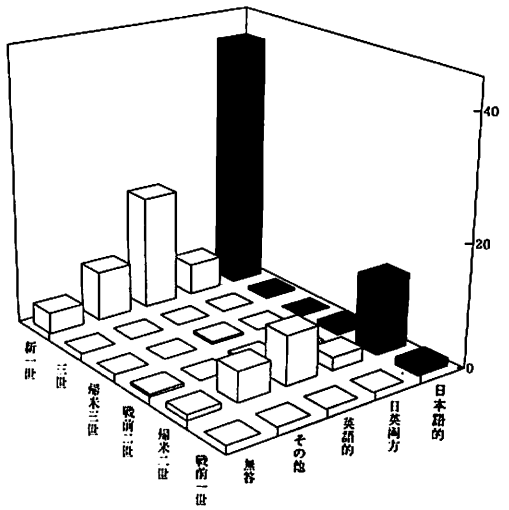

図14-1　困惑のしぐさ

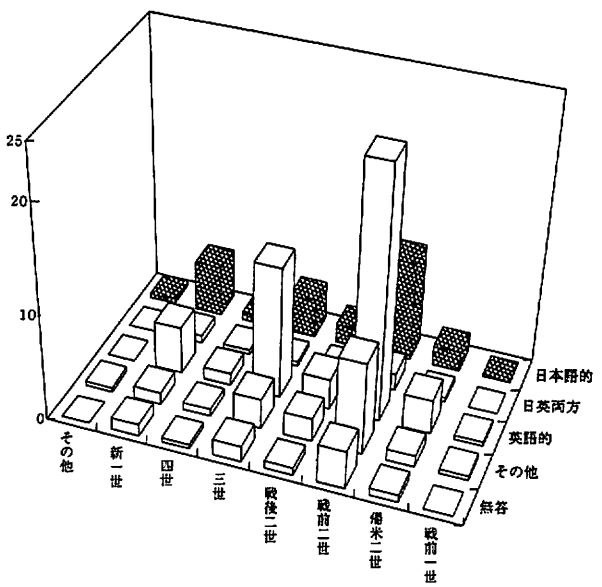

図14-2　困惑のしぐさ

（3）主観的事項

次に主観的な事項についてその様相を整理してみる。

その中でも，まず日本語に直接にかかわる面から見てみよう。

（3－1）日本語にかかわる事項

〈1〉「日本語の将来」

まず図15-1の日票による場合，新一世・帰米二世ともに日本語の将来について「必要で使われる」と答えた者がかなり多く，「必要ないが使われる」がこれに次ぐ。アメリカでの日本語の将来について明るい見通しを持っていることが分かる。最も否定的な「必要なし・衰退」の回答はほとんど無い。この世代の日本への近さと，近年の日本の経済的な好調さと日本語ブームなどに支えられた感想であろう。

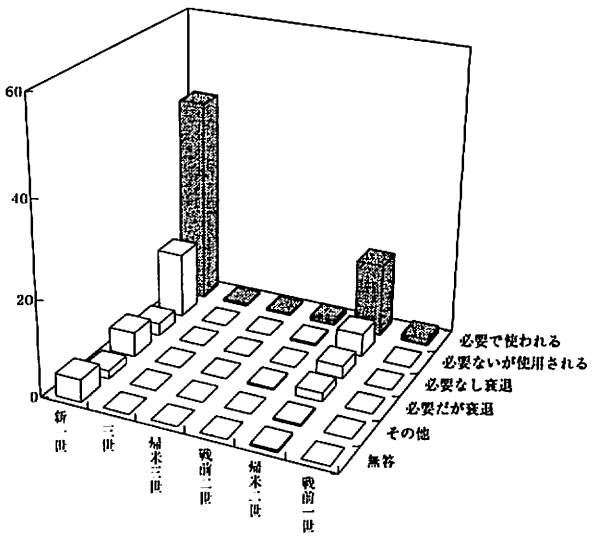

図15-1　日本語の将来

図15-2の英票の回答でも，総体に「必要で使われる」「必要ないが使われる」の率が高く，帰米二世と戦後二世はかなり積極的な感想，戦前二世は「必要なし衰退」「必要だが衰退」など消極的な観測の回答もまじって多様，三世・四世もやや多様な回答をしている。

戦前二世の世代は「日本語のテレビを見る」項でやや分裂した様相を見せたが，ここでも同様な様子があり，日本的なもの・日本語に対して複雑な感情をもった世代のようである。

概括すれば，新一世・帰米二世など日本に近い世代では積極的な観測があり，戦前二世の世代や若い世代になると日本語から離れる傾向がみられるためか，やや消極的な将来を考える傾向がある。しかし，概して日本語の将来について肯定的な回答がなされている。

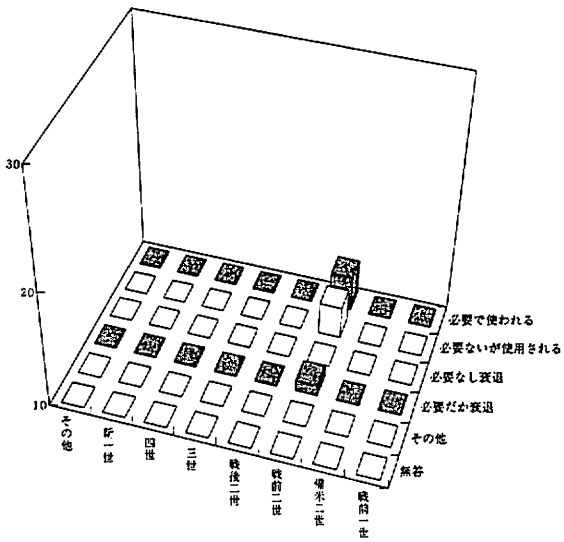

図15-2　日本語の将来

〈2〉「敬語についての意見」

この点はどうであろうか。

図16-1の日票の場合，新一世・帰米二世ともに「素晴らしい・保持すべき」という意見が多く，特に新一世に顕著であり，「もっと簡単に」との回答もあるが，これは割合からすれば帰米二世に多い。しかし，両者とも積極的な肯定意見が強いことになる。

これが図16-2の英票の場合，新一世・帰米二世・三世は「素晴らしい・保持すべき」が優るが，他の戦前二世・戦後二世は「もっと簡単に」が多く，四世は両者が拮抗する。「必要ない」は戦前二世の回答が目立ち，この世代はやはりかなりゆれのある回答状況がある。

概括は難しいが，積極的支持は新一世・帰米二世を中心とするやはり日本との近い関係にある世代であり，他の世代は消極的肯定の態度，戦前二世の回答は「もっと簡単に」を筆頭にかなりゆれがある，といったところであろう。

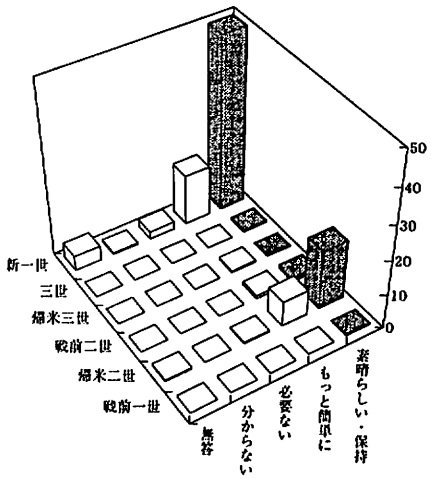

図16-1　敬語

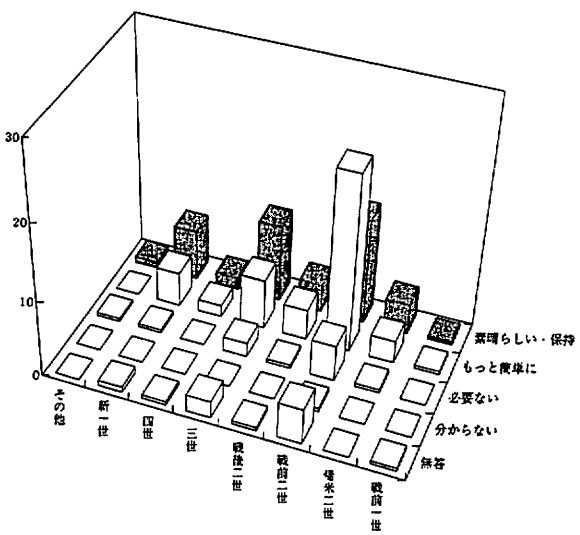

図16-2　敬語

〈3〉「日本語の保持」

これは「日系人なら日本語を話せて当然だ」とする意見への回答を求めたものである。

図17-1日票では，帰米二世は肯定的意見が強く，新一世でも同様ながら，しかし賛成しない率もかなりあるのが注目される。新一世では英語社会への同化要請が強

く，こうした意見になるのだろうか。

図17-2 英票を世代ごとに見ると，強い肯定意見は帰米二世・戦後二世にあり，ほぼ賛成は戦前二世・三世・新一世にみえる。四世は「思わない」が目立つ。ここでも戦前二世は戦後二世と比較すると分かるように，「そう思う」の多さもさることながら「思わない」が一定の率で出てくるところが注意される。戦後二世から三世・四世へと「思わない」が増えていくのも順当であろう（実は年齢では戦後二世の方が三世より若く，それだけ日本とも近いか)。

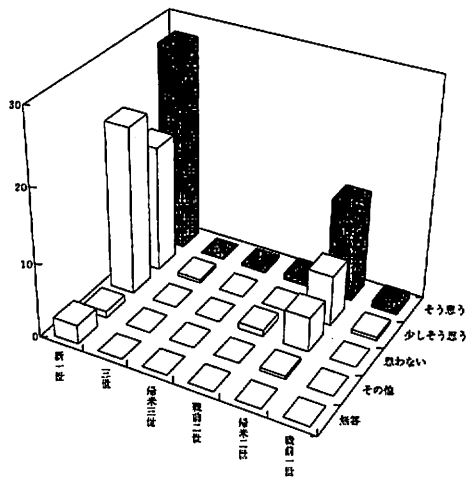

図17-1　日本語の保持

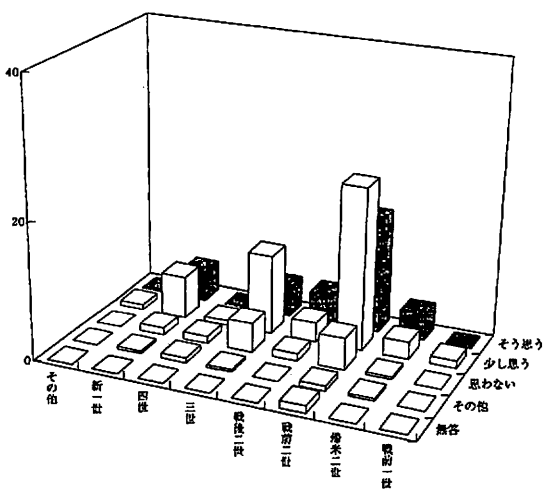

図17-2　日本語の保持

（3－2）エスニシティ関連事項

次に言語とは直接かかわらない事柄を考える。

〈1〉「好きな食べ物」

図18-1が日票の場合である。戦前一世・帰米二世・新一世とも「和食」に次いで「洋食」「どちらも好き」が最も多く，しかし「和食」の好みが一番強いようである。

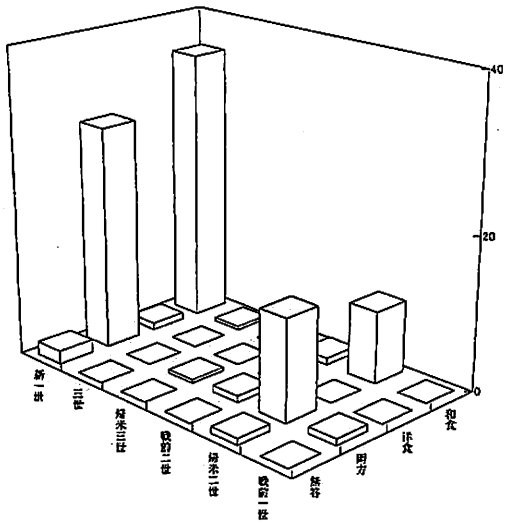

図18-1　好きな食べ物

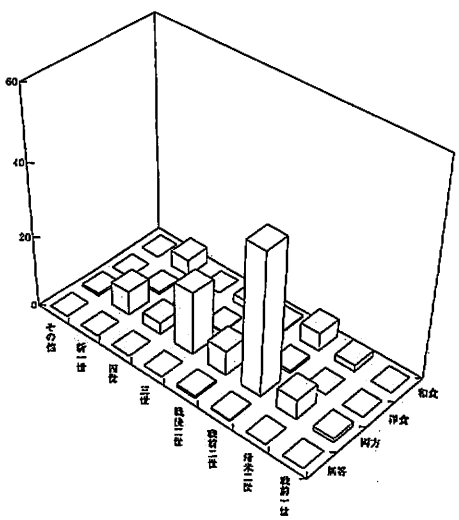

図18-2　好きな食べ物

図18-2英票では，どの世代も「どちらも好き」が一番になり，「和食」が次ぐけれども日票ほどの高さはない。しかし，三世・四世など若い世代も和食を好む者がいる。戦前二世はここでも「和食」と「どちらも」に分裂気味のようであるが，はっきりしたことは言えない。三世より世代を経た四世の方が和食から離れる傾向も見られるが，これも母集団が少ないので確実なことは言えない。英票全体の世代については，和食を食べることもあり，どちらも好きということであろう。

〈2〉「伝統文化への興味・関心」

日系の伝統文化への関心はどうであろうか。質問は「日本の伝統的な文化に興味があるか，あればそれは何か（太鼓・剣道・歌舞伎・茶道・祭りなど）」という質問で，選択肢は以下の図のようなものを用意した。

図19-1の日票の場合，新一世・帰米二世ともに「少しは興味ある」から「興味を持ち習っている」までの回答が多い。

図19-2英票の場合は，戦後二世・三世・四世がかなり積極的な興味をもつと回答し，新一世・帰米二世もかなり興味をもち，これに対して戦前二世は興味を持つ層が多いものの，一方で「全く興味なし」と回答する層もその世代の20パーセント強ある。ここでも戦前二世の複雑な状況がある。

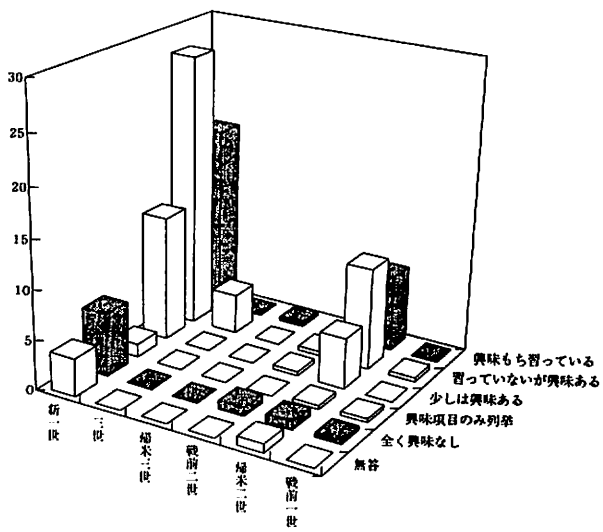

図19-1　伝統文化への興味

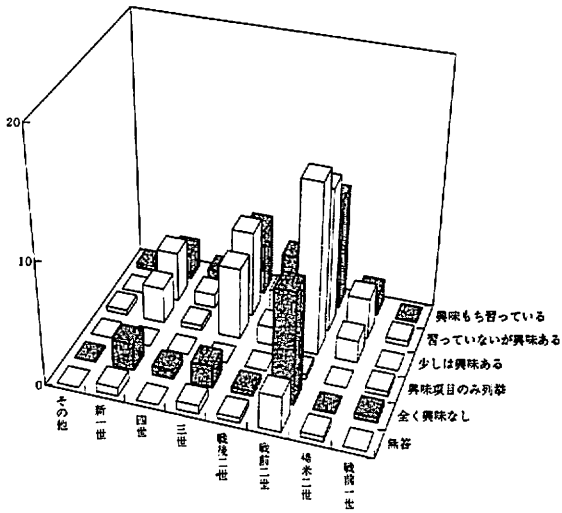

図19-2　伝統文化への興味

全体には興味をもつ世代が多く，しかもこの場合には三世・四世という若い世代にもそれが見られることが注目される。これに対し，戦前二世は興味をもつ層と持たない層とが分裂気味であり，同様のことは「日本語テレビ」「日本語の将来」「敬語についての意見」にもみられた。

なお，興味あるという対象は，「興味があり習っている」回答からざっと見ても，柔道・空手・合気道，日本舞踊・茶道・華道，太鼓・人形・民謡・詩吟・墨絵・歌舞伎・盆踊りなど多岐にわたっている。恐らくこれらの習い事なども日本語によるか日本語まじりでなされていることが多いのであろう。三世・四世などの日本語から離れている世代も，こうした世界の断片的ではあるが象徴的な日本語単語に接して，日本的なエスニシティを育むこともあるのだろう。

江渕一公氏は，サンノゼ日本町における三世の太鼓をとおした新たな活動の中で民族アイデンティティが形成されていることを報告している[11]。

〈3〉「日本の伝統文化の保持」

これは，「日系人なら日本の伝統文化を持ち続けるべきだ」という設定への意見を求めたものである。

図20-1日票では，帰米二世・新一世とも積極的肯定の意見が多く，帰米二世はとくにこれが強い。

図20-2英票の場合は，全体に「ややそう思う」が多く，肯定意見が強い。この中では特に帰米二世に積極的意見が強い。また，「そう思わない」意見は実数としては戦前二世にややあるが，全体にはかなり低く出ている。

日票の回答層である帰米二世と新一世など日本に近い層がかなり積極的であり，英票で答える世代もかなり肯定派であり，消極派は全体に少ない。

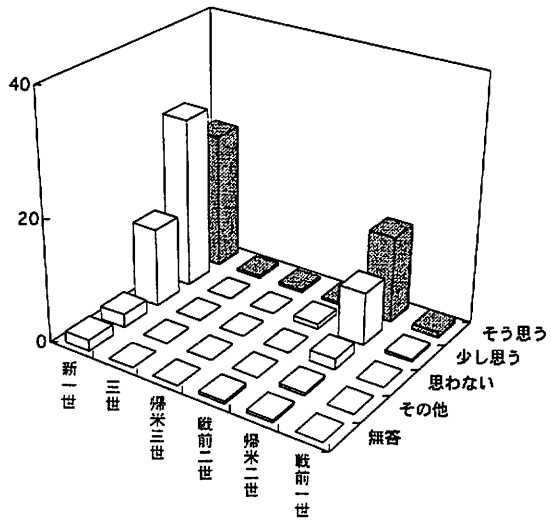

図20-1　伝統文化の保持

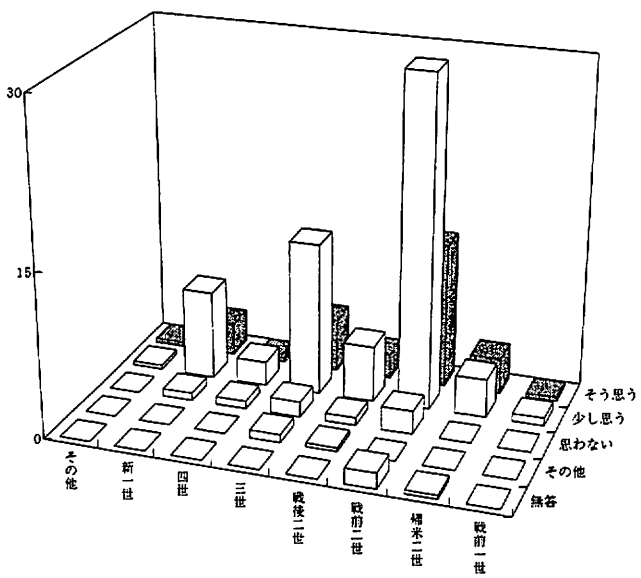

図20-2　伝統文化の保持

〈4〉「日系施設に出掛けるか」

この質問は「あなたは日系人の教会・仏教会や県人会やコミュニティーセンターなどに出掛けますか，それは何ですか」というものである。

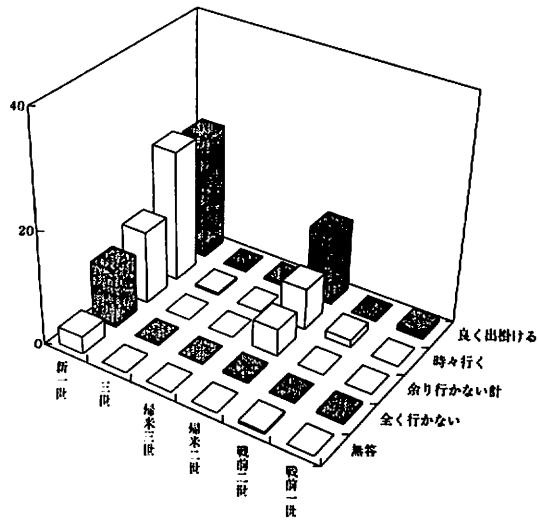

図21-1　日系施設

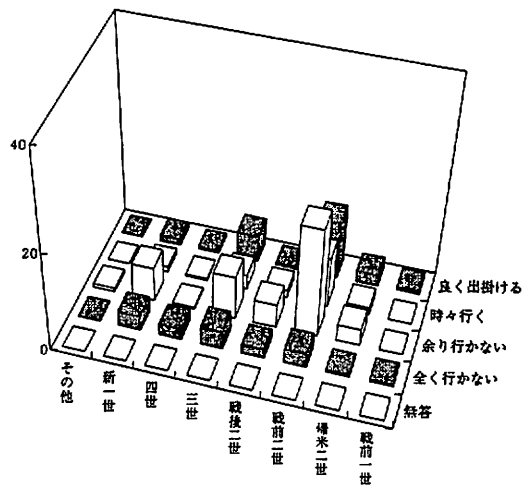

図21-2　日系施設

図21-1日票では，新一世は「良く出掛ける」と「時々行く」が最も多いが，「余り行かない」「全く行かない」もかなりある。これに対し帰米二世は「良く出掛ける」と「時々行く」が多く，「全く行かない」わずかである。新一世は日系施設に行く者

と行かない者とが分散しがち，帰米二世は行く方向が強い。

図21-2英票では，全体に「余り行かない」が最も多く，それは新一世・戦後二世に多く，三世は行く者と行かない者とが分散気味，四世になると「全く行かない」が多い。戦前二世はどちらかと言えば「行く」傾向がつよいが，三世ほどではないがやや分散気味である。

日票と英票との対比では，同じ世代でも新一世・帰米二世の世代で見ると，日票での回答層は出掛ける傾向が強く，英票の回答層は行かない傾向が強い。言葉と日系の拠り所の具体的な機関との相関が見られる。また，英票になるが，戦前二世・戦後二世から三世へと次第に足が遠のき，四世になると行かない層が大部分となる。世代を経るにつれて日系集団から疎遠になることを示唆している。

出掛ける対象となる日系施設で多いものは，県人会を筆頭として，教会・仏教会，日系コミュニティーセンター，禅宗道場，また俳句や生け花・空手などの会があげられている。

〈5〉「オリンピックでの応援」

これは「オリンピックで日本とアメリカの選手が戦います，どちらを応援しますか」という設問であった。

図22-1日票では，戦前一世・帰米二世は「両方」が多くて「日本」が少しある。その中では，帰米二世の「日本」がやや目立つのが注目される。全体にはやはり両世代ともに日本に近いのである。

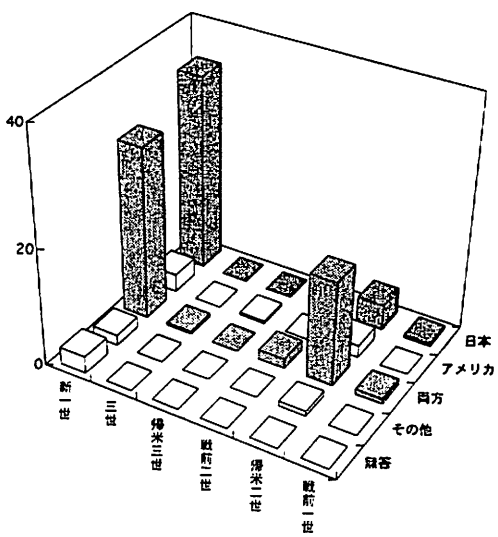

図22-1　オリンピックの応援

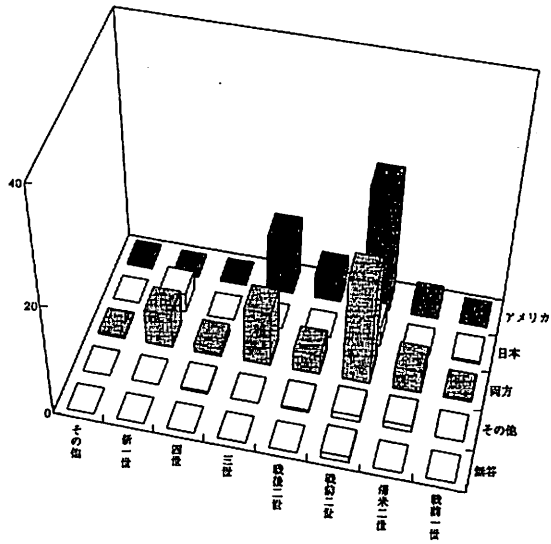

図22-2　オリンピックの応援

図22-2英票では，「アメリカ」と「両方」とが拮抗し，回答数の多い戦前二世・三世ともにアメリカがやや上回るが，四世は拮抗する。三世と四世との差の意味するところは母集団数が少なくてはっきりしない。こうした中で，戦前二世が「日本」とする率がいくらか目立つ。新一世は「両方」であるが「日本」もその半分ある。

日票と英票との差は，やはり日本に近い世代と遠くなりつつある世代との差であるが，帰米二世と戦前二世とにはいくらか分裂した様相がある。帰米二世については，日票・英票それぞれでは日本贔屓・アメリカ贔屓の対応があるが，帰米二世としてくくると，日票で答える者と英票で答えるものとが分裂気味の回答を呈することになる。

〈6〉「結婚なら」

図23-1の日票の場合，「日系人でなくては」の回答はわずかで，「日系人が望ましい」が最も多い。この率は帰米二世にやや多く，新一世は「こだわらない」方向にも幅をもつ。

図23-2英票でも，回答した世代は全体に「日系人が望ましい」が最も多いが，「こだわらない」とする率がやや多くなる。各世代ごとでは，新一世・帰米二世・戦前二世が「日系人が望ましい」の方向にやや傾くのに対して，若い世代は「こだわらない」への傾斜が高くなる。

近年の日系人のインターマリッジは極めて高く，次第に「こだわらない」方向が多くなるのであろう。

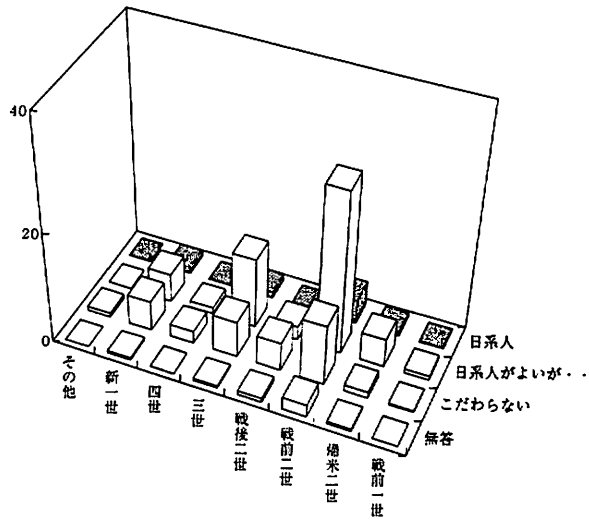

図23-1　結婚

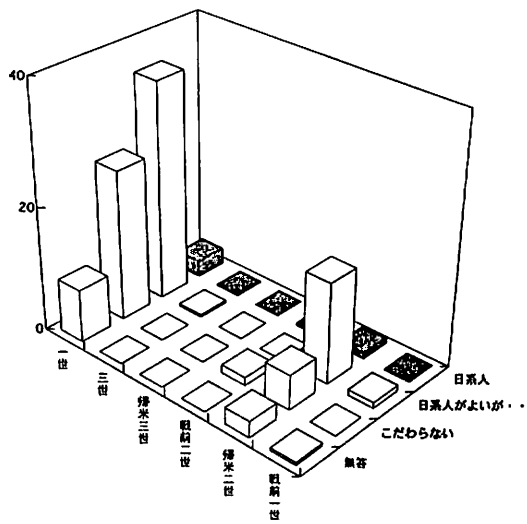

図23-2　結婚

〈7〉「嫌いな食事を出されたら……」

これは「初めての訪問先で嫌いな食べ物を出されたらどうしますか」の設問であった。

図24-1の日票では，帰米二世・新一世とも「黙って食べる」が最も多いが，「食べずに訳を言う」「少し食べて残す」もかなりあり，両方を合わせると「黙って食べる」率を上回る。「食べない」とする回答は新一世より帰米二世の方が少ないのは，新一世の考え方の新しさを思わせるものか。

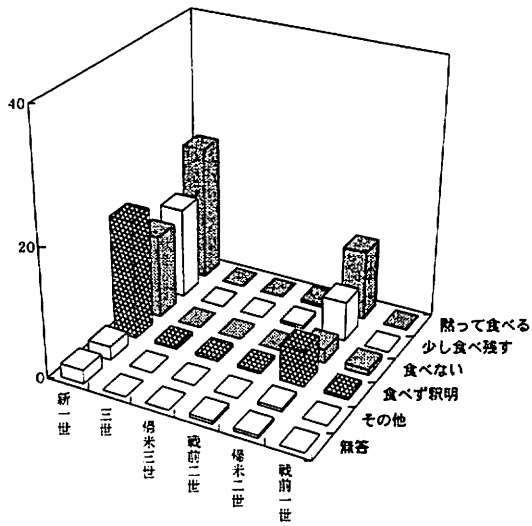

図24-1　嫌いな食べ物を出されたら……

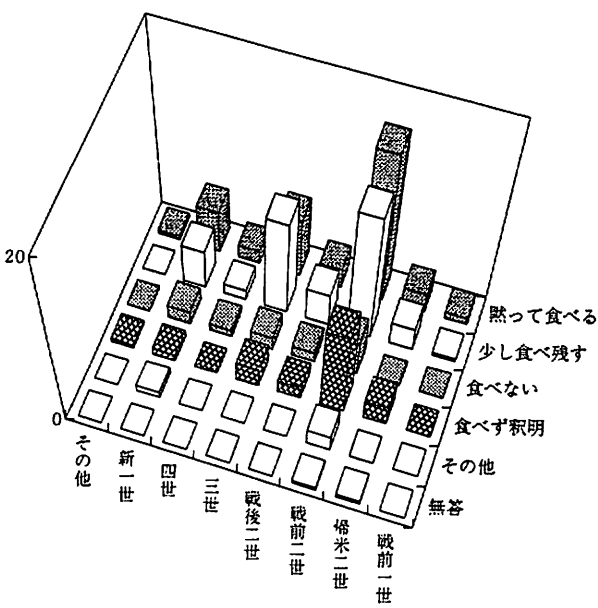

図24-2　嫌いな食べ物を出されたら……

図24-2の英票では，世代別に見ると，「黙って食べる」が戦前二世・四世・新一世に最も多く，この中では戦前二世の比率がかなり高い。しかし，戦前二世は「食べずに訳を言う」もかなり多く，ここでも分裂気味である。「黙って食べる」が四世にも多いのに驚くが，これは「オリンピックの応援」でも四世が日本的な近さをみせていて偶然ではないかも知れない。ただ母集団数が少ないので，やはり四世一般を代表すると見ることはひかえる。次に，「少し食べて残す」が三世・帰米二世・戦後二世に多く，特に三世が目立つ。全体に「黙って食べる」の率が多い日票よりも，残す方向がやや強く出ている。

ここでも，戦前二世の分裂気味の様子，また日票・英票を合わせて見れば帰米二世のやはり分裂気味の様相が認められる。

4．概括

以上，調査票の主要な項目のいくつかを取り上げ，やや個別に分析してきた。調査の母集団数も多くはなく，一つの事例的な調査の範囲にとどまるけれども，いくつかの事柄が判明したのではないかと思う。

第一は，従来各種の研究でも明らかなように，世代間の特徴である。

最も日本に近い回答を寄せるのは帰米二世であり，次に新一世が続く。ただし，帰米二世も日票・英票を合わせて見ると，時に世代の中で意見のわかれる場合も見られた。

これに対し，やや日本から遠い位置にあるのは英票で回答した世代で，しかし〈二世〉世代類から三世・四世と世代を経過するにつれて，概して日本語・日本文化から遠ざかり，英語・アメリカ的な様相を呈することが見て取れた。この中で，しかし戦前二世は各種の回答に意見の分裂する様相もあった。

第二は，この戦前二世・帰米二世がその内部でかなり意見や認識に分裂の気味を呈する点である。今回の調査では，これらの世代の母集団数はかなりあって，どうやらこの世代一般の状況である可能性が高い。いま帰米・戦前二世群の具体的な状況，とくにこの世代が成長期にあった第二次大戦前後の時期にふれることはできないが，総じて日本への接近と離反との交錯した不安定な環境の中で苦しんだ世代と言われている。こうした点が今回の回答に反映しているのではないだろうか。

第三は本稿の目的の一つであるが，日本語の維持がエスニシティにどのような関連があるかないかの事柄である。新一世・帰米二世・戦前二世などの古い世代では日本

語の維持が良好であり，若い世代ではそうではなく，わずかに「話す」「聞く」がいくらか良好な程度であった。では，だから日系エスニシティへの関心・意識が若い世代に少ないかと言うと，そうでもない。

事柄はエスニシティの捉え方にも関わるが，日系文化への興味・関心は日本語力の弱い若い世代にも強く，今日では日本語の維持と日系のエスニシティの継続の意識とが乖離している。

その例を「日系人なら日本語が話せて当然だ」と「伝統文化への興味・関心」「日本の伝統文化の保持」との間で見てみよう。

帰米二世と新一世は日本への近さがあるので省くとして，英票で回答した世代の図17を見ると，「日本語を話せて当然」の意見に対して，図17-2では三世・四世が肯定的ではあるが「そうは思わない」も無視できない。また，図2の言語能力でもこの世代は日本語が極めて弱いのである。これに対して，「日本の伝統文化の保持」の図20-2では三世・四世世代がこれに賛成していて，逆の「そうは思わない」は少ない。さらに図19-2「日系文化への興味」項でもかなりの興味を示しているのである。

この辺りには，戦前と戦後との間に言語と文化についてのさまざまな事情の変化があるようである。戦前は日本語の教育の中で，日本語の維持と日系エスニシティの維持・継承とが車の両輪のように分かちがたく結びついて機能していた。それが，今日ではその一方の日本語の維持・継承は関心のある人々，日本語の環境を身近に持つ人々の間で行われるだけである。一方，近年のリドレスの成功，日本経済の隆盛などに刺激されて，日系人であることに以前とは違った意味で誇りや関心が持たれるようになってきた。そこで日本文化・社会への興味が内外からおこり，若い世代での日本語を離れた形でのエスニシティの再認識がみられるのであろう。

ただし，残念ながらその質の模様について，本稿の段階では言及できない。

本稿の延長として次の課題となるのは，以上のような個別的な項目整理を相互の関連の下に分析すると，どのような像が浮かび上がってくるのかということがある。この点は，次の久野の発展的な論文の中で本稿では紹介のない項目にも及んで論じられている。併せ読まれたい。ただし，世代区分の方法に若干の違いがある。

（注）

1）ハワイの様子については，比嘉正則「ハワイの日本語の社会言語学的研究」学術月報26，1974などがある。

2）ただ，この混用する単語群の性格を考察して日系人らしさを研究する視点は存在する。たとえば，大橋克洋「日系アメリカ人小説におけるイタリクス使用について」（「立命館言語文化研究」第5巻3号所収）の論などが参考になる。

3）竹沢泰子『日系アメリカ人のエイニシティー』東大出版，1994などを参照。

4）注（1）比嘉論文，また小林元文『複合民族社会と言語問題』大修館書店，1989などを参照。

5）前田　卓「日系アメリカ人（1）――一世，二世と三世の比較研究ー」（「関西大学社会学部紀要」1973）。

6）Yamano,Tina Kazumi (1991). UCLA Japanese American Students: Ethnic Identity and Language Revitalization. Master Thesis. University of California, Los Angeles.

7）Hayashi, Brenda Keiko, (1985'). Language Attrition: Changes in the Japanese Language Over Three Generations. Unpublished Master Thesis. University of California, Los Angeles.

8）Conner, John (1977'). *Tradition and Change in Three Generations of Japanese Americans.* Chicago: Nelson-Hall

9）江淵一公「日系アメリカ人の民族的アイデンティティに関する一考察」（綾部恒雄・編『アメリカ民族文化の研究』所収）

10）この区分も久野の示唆によるところが大きい。

11）注9）のものによる。

謝辞：この度の調査にあたってご協力いただいたカリフォルニアとその周辺の日系人組織ならびに各位に心よりお礼申し上げます。